

編集後記

十二指腸ファイバースコープによる乳頭内挿管の手技が確立され、また経皮的経肝胆管造影法が普及するにつれて、従来、盲点とされていた胆道、膵悪性腫瘍に対する関心が、ここ数年一挙に昂まってきた。本号では胆道系悪性腫瘍の特集号として、この領域の癌の診断と治療の現況について、診断面を武内教授ら、外科治療面を土屋教授らの執筆により掲載することができた。おふたかたともこの領域に永年取り組んでくれたので、診断面では、これまでそれぞれの分野の学会で討論されていた PTC, ERCP, HDG, 細胞診, 血管造影など各種検査法の問題点がこの一篇に集約されているし、また外科治療面でも手術成績の現況、問題点、その成績向上のための早期診断に対する対策などが、いずれも豊富な経験に基づいて論じられている。この二篇の論文により、胆道系悪性腫瘍の診断、治療の現況を十分に把握できると思う。また座談会も、それぞれの検査のベテランにより手技、診断上の細かい点が、村上教授、高木博士の司会でまとめられており、特に PTC, ERCP の選択の問題、これらの手技による合併症の防止策、早期発見のための臨床症状や生化学的検査値の読み方、primary sclerosing cholangitis の問題、更に放射線療法の試みまで、実地臨床上の種々の問題点が討論されており、きわめて有益な座談会であると思う。

その他、研究欄、症例報告など、いずれも新しい分野を開拓する研究、珍らしい症例の発表であり、全篇を通じて、読者の皆さんに喜んでいただけるこの6月号であると思う。

<信田 重光>

<編集> 早期胃癌研究会